

プロフィール

オックスフォード大学大学院難民研究センター卒（修士）。難民問題の研究に関心を持ちながら、2007 年より UNHCR 等の国際機関の東京事務所、ウガンダ・ラカイ県の Hope Child Care Program (NGO)、難民を助ける会 (NGO) の東日本大震災支援活動などで非常勤職員やインターンとして、援助の実務にたずさわる。2011 年 7 月より広島平和構築事業の研修員として UNHCR ダダブ事務所（ケニア）に派遣。コミュニティ・ユース担当官として教育、雇用、スポーツ文化促進、キャンプ運営などの難民キャンプの青年支援事業に従事する。その後も引き続きダダブで同担当官として勤務。東京都東村山市出身。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

21 歳になるまで海外にでたこともありませんでした。中高時代の英語の成績は後ろから数えたほうがはやいくらい。いつも期末テストの居残り補習者の常連でした。日本の平穏かつ勤勉な風土に守られて自由闊達に過ごしながらも、狭い世界で育ちました。

すこしだけ自分が変わったのはコソボ紛争のとき。高校生でした。あまりに不勉強のあまり、当時の深刻なニュースを茶化した私は、そのことを許せない友人におもいきり殴られました。「おまえの父ちゃんの国の大使館も誤爆されるかもよ」とか言ったと思います。自分の無知を恥じました。それから大学では国際政治の研究に興味をひかれ、難民問題の勉強もするようになりました。また少し変わったのは UNHCR や NGO で実務の世界を知ったとき。難民に会い、アフリカで働き、そしてエイズ末期の子どもの手を引いて病院にいったとき、現実を知ることには、責任が伴うのだと思いました。難民保護をミッションにしようと決めたくっかけです。

人材育成事業の募集を初めて知ったのは大学卒業してすぐのとき、まだパイロット事業でした。当時は経験も知識もまったく不十分で、いつか挑戦しようと思っただけ心に決めました。それから 4 年、難民の保護と支援について本格的に勉強し、援助機関で実務にもたずさわった後、私は本事業に応募しました。職務経験はまだまだ足りないけど、と釘をさされての研修員採用でした。

2. 国内研修の感想は？

すばらしい講師陣、練りこまれたワークショップ、豊かな実務経験ある研修員との切磋琢磨。私がここで書きたいのはそういうことではありません。それはすでにほかの研修員のみなさんが詳しく述べられているとおりです。私は、「国内研修は海外派遣の準備」と思い込んでいた私の考えをすっかり変えたできごとについて書きます。あの東日本大震災です。

未曾有の震災が発生したあの日、私たちは国内研修の最終日、最後のキャリアセミナーのさなかでした。震災発生の日後にはボランティアとして、2週間後からはNGOの緊急支援専門家スタッフとしていわき市、石巻市、釜石市などにいきました。難民を助けたいと言っておきながら、故郷を追われた日本の「避難民」から目を背けられないと思いました。

私が担当したのは物資支援と炊き出しの調整業務でした。避難所でのニーズを調査し、地元のボランティア団体と協力して、次々に全国から運ばれてくる援助物資に優先順位をつけていきました。被災地はとまどっていました。いきなり生活基盤をうばわれ混乱しているところに、遠く全国から支援の波が押し寄せたからです。ゴールデン・ウィークにもなるとさまざまな団体が炊き出しに訪れ、宮城県鮎川で知り合った被災者の女性は「毎日がお祭りみたいね」と呟いていました。

支援が長期におよぶにつれ、被災地での信頼関係もできました。そのうちのひとりが、石巻市のある避難所のまとめ役になっていた漁師の男性。彼はいいました。「たくさんの団体がタダで物資を置いていく。それはありがたい。ありがたいけれども、それではいかん。避難所からいずれみんな自立して生活しなきゃならんものだから。でも目の前にタダのものがあれば、それは難しいんです。」

ハッとしました。これがまさに国内研修の授業でやった平和構築における「国際援助依存」の構図ではないか。そう思ったとたん、広島での研修が次々と思っておこされました。広島での調整業務のワークショップで、支援をつなぐUNHCRの役割を演じたことは、地元の役所やボランティア団体との調整そのものでした。鮎川の女性のつぶやきもそうです。私の脳裏によぎったのは、現場のニーズから離れがちな援助を防ぐための現地主導原則（オーナーシップ）という援助のルールでした。「お祭りみたい」な支援は、被災地が長期的に必要な支援ではないのだという、ごく当たり前のことを思い出したからです。

国内研修で学んだことは国境の垣根をこえるのだと、震災支援によって初めて気づきました。平和構築は海外でするものと知らずに思い込んでいたような気がします。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

ダダブ難民キャンプは、難民人口47万人（2012年9月現在）が暮らす世界最大の難民キャンプです。ケニアとソマリアの国境沿いに位置し、難民キャンプができたのは1991年。それ以来、迫害を逃れて20年にわたりキャンプに長期滞在する難民と、旱魃や治安悪化によって近年キャンプに逃れてきた難民との、二タイプが混在する特異なキャンプです。



【区画整理された乾いた土地に、7万人の難民が暮らすイフォIIキャンプのようす。紛争と旱魃が原因で逃れてきた新しい難民を受け入れるために新設されたキャンプのひとつ】

コミュニティ・ユース担当官としての最大の仕事は、目まぐるしく変化する支援環境の中、青年支援のプロジェクトを途絶えさせず、難民の青年と一緒に保護と支援のサービスの維持と向上に努めるということでした。そのためにまずは前任者の積み上げたコミュニティとの信頼関係や事業成果に学びつつ、仕事を整理しなおし、UNHCR 全体の戦略に位置づけなおすところから始めました。青年とはケニア政府の定義で 15 歳から 35 歳までの男女を指します。

そうはいつでもなかなか戦略通りにコトは運びません。赴任前後の半年で 20 万人の難民がキャンプに押し寄せました。旱魃と紛争の影響です。キャンプ数も増加し、また受益者となる青年のタイプが複雑化しました。カンビオスキャンプはそのためにできた新しいキャンプです。そこでは当初、NGO が難民の若者を支援しようにもコミュニティ側の受け入れ態勢がありませんでした。若者が組織化されていなかったからです。そこで私はモデルとなる 3 つの青年団体を組織し、団体間の意思疎通をはかるための「ユースアンブレラ」という仕組みを、他の難民キャンプに倣って立ち上げました。モデルができるとほかの若者も自発的に組織をつくるようになり、これによって中小ビジネス支援などが徐々に進むようになりました。



【略奪・レイプ・犯罪等の被害者を保護するイニシアチブの戦略を、青年組織メンバーに説明するようす】

数か月後には援助関係者の拉致事件がおき、ケニア警察が頻繁にテロの標的とされるようになりました。難民キャンプの治安が急激に悪化し、職員がキャンプに行けなくなったため、略奪・レイプ・暴力などによる被害者を発見することが困難になりました。難民の保護を任務とする UNHCR にとっては死活問題でした。そこで私は「間接的保護介入イニシアチブ」を打ち出し、キャンプにネットワークをもつ難民の若者たちを保護のモニタリングに取り込むことで、かれらが被害事例を迅速に報告するようなしくみを創りました。業務

の専門性や秘匿性を傷つけることなくいかに青年組織に伝えるかという課題を克服しつつの取り組みでした。

また青年支援の柱であるスポーツ・文化振興についても、その成果が目に見えにくく、さらに一部の難民のリーダーにその機会が独占されているという問題もありました。それに対しては「ダダーブスポーツイニシアチブ 2012」として、保護を目的としたスポーツプロジェクト案を難民コミュニティから公募しました。「難民が企画し、コミュニティに還元する」を軸に、反薬物キャンペーン、清掃キャンペーン、難民とホストコミュニティの相互理解プロジェクト、女性のスポーツ参加プログラム、障がい者支援など 44 もの案が採用され、男性 1586 名、女性 315 名のスポーツ指導者、スポーツクラブおよそ 300 団体、高等学校 7 校、職業訓練校 4 校、

障がい者組織 5 団体、非ソマリ系組織 6 団体、そしてそれらを通じて 1 万人以上の就業も就学もしていない若者を支援しました。

4. 海外実務研修の感想は？一番印象に残っていることは

日本でも少し報じられたようですが、今月ソマリアのモガディシオで約 20 年ぶりの大統領選挙があり、21 年続いた事実上の無政府状態の終結に大きな期待がかけられています(2012 年 9 月現在)。難民キャンプにはこのことが興奮を持って伝えられ、キャンプのソマリ系の若者は口を開けば選挙のことばかり。それだけ「選挙」は難民キャンプでも特別な意味を持ちます。



【反薬物乱用キャンペーンのサッカーマッチで優勝するチームとそのサポーター。キャンプの若者の多くが Miraa という合法麻薬を服用して日々をすごしている。】

「2 週間後に青年議会の臨時選挙を実施する」と、急にダガハリキャンプの青年リーダーから連絡が入ったのは 2 月下旬のことでした。ダガハリには約 4 万人の若者がいます。そのリーダーをきめる選挙です。選挙にはそれなりの準備期間が必要です。当然、国連や NGO 職員の間では、性急な選挙を懸念する声が聞かれました。国連や NGO にとって、選挙は非常に敏感な問題です。異民族や氏族関係でくすぶる対立構造が、選挙で表面化する危険性があるからです。そのため青年組織の選挙といえども、然るべき手順で、政府や国連、NGO の監督のもと実施されねばなりません。もちろん彼らの同意なしに選挙は実施できません。



【青年議会議長選挙の投票前の緊迫したようす。写真に写るのは選挙監視団のメンバーで、左からキャンプ女性議長、自警団長、キャンプ議長、UNHCR を代表して副島さん、ケニア政府難民省、後列は NGO 代表者。右手の 2 名が青年議会選挙管理委員会の若者。】

しかし若者たちには選挙を急がなければならない彼らの事情がありました。前任の議長はアブドライ（仮）でしたが、国連やケニア政府に協力する彼のところに、その活動に反対する勢力から脅迫メッセージが届くようになったのです。そのため彼の身を案じた国連は、身柄をケニ

ア国内の別の場所にうつしました。その結果議長のポストが空席となり、青年組織の運営に弊害が生じていました。キャンプの治安が悪化するなか、青年組織はキャンプの運営に大きな役割を果たすようになっていたので、これは致命的な状況でした。

青年選挙管理委員会のメンバーと私は、なんとかケニア政府難民省、国連、NGOの説得にあたり、選挙は実施されることになりました。議長のポストにはミレー（仮）とシャンゴロ（仮）という二人の若者が立候補しました。78名の青年議会議員が投票権をもつ議長選では、不測の事態が起こらないとも限りません。十分な準備期間がないにもかかわらず、選挙会場の治安維持や、候補者への選挙法順守の徹底まで、選挙管理委員会の仕事ぶりはみごとなものでした。

臨時選挙は大成功でした。シャンゴロがミレーの倍の票数を集め、次期議長に就任しました。ふたりは互いの健闘をたたえあい、そしてソマリ式の握手とハグをかわして敬意を表し合いました。選挙活動の不正が横行する、気に入らない選挙結果を受け入れない、ボイコットして新たな議会を勝手に制定する、そんなことが過去の青年選挙では当たり前にあったので、これは大きな成果でした。

さらに驚くべきことがありました。同日行われた青年女性議長の選挙で、なんとキャンプでは少数派のスーダン人コミュニティから立候補したグラディス（仮）が大差をつけて当選したのです。多数派であるソマリ人から多くの得票を集めての勝利でした。異民族間の諍いが絶えないキャンプの環境で、これはあり得ないことでした。女性青年組織をひきいて、ソマリ系であろうが少数派であろうがメンバーとして迎え入れてきたこれまでの彼女の貢献を、みなが認めたことの証でした。当初は青年組織の選挙運営能力を疑っていた政府や国連、NGOの選挙監視団も、くちぐちに「すばらしい選挙だった」と称えました。ダガハリの青年選挙に私がみたのは、まさにソマリアの未来でした。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

ダダーブでひとりのUNHCR上級保護担当官と出会いました。彼の名はママドゥ（仮）といいます。そのころのキャンプの治安は急激に悪化し、職員の退避が真剣に検討され、キャンプ内での活動が一時的に停止されるなどしていました。ママドゥは、麻痺に陥る寸前だった現地事務所を立て直すために本部ジュネーブから応援にきたシニアスタッフでした。

すくなくとも私から見て、ママドゥの最初の数週間はとても静かでした。立場の上下関係なく、国連職員も難民リーダーも関係なく、現場のようすを熟知するひとびとに精力的に会い、じつとその言葉に耳を傾けているようでした。彼の語り口はとても穏やかで、でも鋭い目をして私の話も聞いていました。あるとき彼がいました。「なにがあっても保護と支援は止めてはいけません。そのためにこの事務所はかわらなければいけない。これまでやってきた国際職員・ケニア人職員主導のキャンプ運営は、難民主導にかえなければ成り立たない。そのための人材がキャンプにはある。」

そう判断した途端、いままで私がみたことのないような力強さでママドゥは計画を推し進めていきました。現場では本部からやってきた国際職員に対する漠然とした反感があるものです。

「現場にいない人間に、なにがわかるものか。」しかし、それもいつかでした。

「事業継続案」という戦略をまとめ、難民キャンプの人材を動員して水や食料の流通を回復し、難民の組織を通じて弱者の保護と支援を維持しました。警察機能や自警団を強化し、悪化した治安リスクを最小限におさえました。マヒ状態に陥ったようにみえた事務所がしだいに息をふきかえしていくのは、だれの目にも明らかでした。



【世界難民の日、まだ見ぬ故郷への帰還を歌にして力強く披露する小学生。ハガデラキャンプにて。青年組織はキャンプのイベントの運営・動員を任されている。】

さまざまに批判されもする国連にあって、彼のような人物が国連の良心なのだと思います。なにより私を驚かせたのは、彼の難民保護に対する強い信念と、それをささえる高い学術的な知見でした。もちろん彼になることはできないでしょうけれども、よき模範に出会えたことに感謝し、私のキャリア・プランの目標にしたいと思っています。

6. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

日本の男性に対するメッセージです。国連や国際 NGO での活躍が目立つのは女性だとよくいわれます。たしかにそう。どこへいっても男性の割合は少ない。びっくりするほど女性ばかりです。「女性の方が、だれかを助けるという精神に優れている。母性本能だ」というようなことを言った人がいますが、大きな間違いです。助け合いの精神は男女共通だし、それは東日本大震災の支援活動をみれば明らかです。そもそも平和構築はプロフェッショナリズムの必要な仕事です。思いやりだけでやっていると思われては、女性もいい迷惑でしょう。

ダダーブで一緒にいた NGO 勤務の日本人男性が言っていました。「私の夢は、国際貢献をいまよりずっとフツウのものにすることだよ。日本で通用する経験と能力があれば、それを少し応用すればいいだけ。難しそうにみえるけど、もっとフツウでいい。ごく一部の帰国子女とかエリートにしか務まらないようなイメージがあるとしたら、それは全然ちがうと思う。」

震災支援をきっかけに、気骨あるたくさんの日本男児に会いました。すでに国際機関で活躍する先輩たちと比しても、その気骨はなんら遜色ないものです。平和構築のすそ野を広げることを目的にした広島人材育成事業は、そのような人材が評価される場所だと思っています。